

京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

1. 研究課題

インドにおける「循環的存在論」の形成——祭祀思想から哲学への発展を中心に
Evolution of the Indian Ontology in the Cyclic Image: Focusing around the Development
Process from Ritualistic Thoughts to Philosophical Views

2. 研究代表者氏名

手嶋 英貴

TESHIMA, Hideki

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月

4. 研究目的

紀元前一千年紀以来、インドでは「人間などの生命体が生と死を繰り返す」あるいは「世界が発生と消滅を繰り返す」といった循環的イメージに基づく存在理解の方法が発展してきた。とくにインドの「人間観」を代表するものとして、業の理論と結びついた輪廻説がつとに知られ、またインドの「世界観」を代表するものとして世界の反復的な生滅を説くユガ説が有名である。そして、これに類する存在理解の方法は、ヒンドゥー教や仏教の伝播によって、日本を含むアジアの多くの国や地域に大きな文化的・社会的影響を及ぼした。そうしたインド的思想の基礎には、存在の様態を「循環的なイメージ」で捉えようとする共通の思考がみられる。しかし従来の学界では人間観と世界観とを個別に研究することが多く、それらの相互関係に目を向けることが少なかった。本研究はこの共通的思考を「循環的存在論」と名づけてその発生・展開のプロセスを明らかにし、かつ南アジア、東アジア、および東南アジアで共有される社会的・文化的基盤について、新たな視野を開こうとするものである。

Since the first millennium BCE, Indian people have developed viewpoints for understanding how the world and living things exist, especially involving a cyclic image, such as viewpoints that "the world repeats its emersion and destruction forever" or that "all living things are in a continual cycle of birth and death." From those, they have yielded the methodology of "reincarnation" based upon the notion of karmic retribution, as well as that of "cosmological cycle of four Yugas" apparently inspired by periodicity of the natural world. The former is the representative methodology regarding living (including human) beings, and the latter concerning the world which encompasses the lives. Cognate thoughts about the way of existence were spread to many Asian countries/regions by dissemination of Buddhism and Hinduism which functioned as conveyors of Indian thoughts, and, subsequently, culture and

society of each countries/regions including Japan were deeply influenced by them. The "cyclic image" upon which the thoughts in question are commonly based, however, has been paid little attention by scholars, because of the tendency that they explore both the methodologies, of existence of living things and that of the world, separately. In this research project, we attempt to clarify what was the process of emersion and evolution of the "Indian ontology in the cyclic image," in which both the types of methodology are meaningfully integrated and related to each other. This research will provide fresh insights into the socio-cultural basis common among South, East, and Southeast Asian countries/regions.

5. 研究成果の概要

研究期間全体を通じて、本班の課題である「循環的存在論」の形成過程を、世界観と人間観の両面において検討し、それぞれについて新規の知見を得ることが出来た。従来の学会で見過ごされてきた法典文献（ヴェーダ補助文献の一ジャンル）の思想性に着目し、そこで世界観と人間観双方の領域で循環的思考に基づく理論が生まれていたことを確認した。また法典文献が、祭祀思想と哲学思想との間を架橋する思想史的意義をもっていたことが新たに確認された。研究期間全体では、定例研究会を33回、シンポジウム3回を開催した。そこでは「輪読」「個人報告」「シンポジウム」という研究活動ごとに下記の成果を上げた。研究期間全体の成果は、とくに2024年度シンポジウムで集約・公表した。それは今後、電子版の成果論集（機関リポジトリ「紅KURENAI」）、および一般書籍（出版元：法蔵館）としても広く公開される。

■輪読：

『ヴァードゥーラ・シュラウタスートラ』第2章（新月満月祭）の4分の3程度まで読み進めた。班員が輪番制で当該文献、および内容の関連する他文献テクストの和訳を提示し、そこから得られる知見を共有していった。これにより、インドの循環的存在論が古代祭祀の文脈でどのように発展したかを、具体的な文献記述に基づき検討することが出来た。なお、残りの4分の1を含む当該テクストの全体を読了するため、研究期間終了後も2025年12月まで輪読を継続することになっている。テクスト読了後には、学界未公刊の校訂テクストをその和訳とともに機関リポジトリ「紅（KURENAI）」で電子公開する予定である。

■個人報告：

研究課題の核である「循環的世界観」の形成過程の解明につながる研究報告が、班員および招聘講師等あわせて35件行われた。インドの専門家のほか、イランやユダヤなどインドに隣接する文明圏の専門家を招聘し、循環的観念の表象について知見を交換した。各回参加者は概ね20名～25名であった。なお、研究会の様子はすべて録画し、後日YouTubeで公開している（限定公開）。その視聴数は各回15件前後である。各研究報告の一部は学術雑誌等の媒体で公表され、また上掲「紅（KURENAI）」での電子版成果論文集にも収録される。

■ シンポジウム：

研究成果を社会に還元するための公開シンポジウムを、研究機関に 3 回開催した（ハイブリッド形式）。延べ人数で、発表者 13 名、指定コメンテータ 8 名、参加者はのべ約 460 名であった。なお、全ての発表とディスカッションは YouTube で公開し、当日参加できなかった人々もタイムシフト視聴が出来るようにしている（2022 年度と 2023 年度のシンポジウム動画の視聴数は 2025 年度末時点で 508 件）。研究発表の一部の成果は、上掲「紅 (KURENAI)」での電子版成果論文集にも収録される。また、2023 年度シンポジウム「『マハーバーラタ』研究の最前線」での発表内容をまとめたものほか、研究班外の専門家からの寄稿も含め、『マハーバーラタ』の最新研究を社会に広く知らせる一般書を株式会社法蔵館より刊行する。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

研究期間内に下記の 3 つの公開シンポジウムを行った。いずれも現地・オンラインのハイブリッド開催とした。参加申込者には後日シンポジウムの録画を YouTube で共有し、タイムシフト視聴による参加もできるようにした。

■ 2022 年度成果公開シンポジウム

「インド宗教文化における『循環』の思想と表象」（発表者 4 名、指定コメンテータ 2 名）
2023 年 2 月 21 日、京都大学人文科学研究所・大会議室、参加者約 100 人。

■ 2023 年度成果公開シンポジウム

「『マハーバーラタ』研究の最前線—伝承の形成と物語の展開—」（発表者 4 名、指定コメンテータ 1 名）2024 年 3 月 26 日、京都大学人文科学研究所・大会議室、参加者約 200 名。

■ 2024 年度成果公開シンポジウム

「インド思想史におけるヒンドゥー法典の意義」（発表者 5 名、指定コメンテータ 5 名）2025 年 3 月 28 日、京都大学文学部校舎第 3 講義室、参加者約 160 人。

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班の成果のうち、『ヴァードゥーラ・シュラウタスートラ』の新校訂テクストおよび和訳は、京都大学機関リポジトリ「紅 (KURENAI)」を通じて電子テクストとして公開する。また研究論文も、同リポジトリで電子版研究論集として公開する（寄稿者は班員および研究会参加者のうち 10 名程度となる予定）。それらのコンテンツは、2025 年度末（2026 年 2 月～3 月）にリポジトリ管理部署へ完成版 PDF ファイルを引き渡し、その後リポジトリ収録のための各種確認や承認を経て、2026 年度内にウェブ公開することとなる。なお、2023 年度シンポジウムで好評を得た『マハーバーラタ』の最新研究を広く公開するために、専門家と一般人の双方を読者として想定する書籍を、2026 年前半に株式会社法蔵館より刊行する。